

Ruriko Tsuchida

施設概要

富山市ガラス美術館

館長 土田 ルリ子

所在地 富山県富山市西町5番1号 TOYAMAキラリ内

開館 2015年8月22日

収蔵品数 約700点

入館者数 28万8139人（2024年度）

つちだ・るりこ  
プロフィール

1967年

1992年

1992年～

2010～20年3月

2020年4月～

2022年4月～

東京都生まれ

慶應義塾大学大学院 文学研究科 哲学専攻  
美学美術史分野修了

サントリー美術館に勤務

サントリー美術館 学芸副部長

富山市ガラス美術館 副館長

富山市ガラス美術館 館長

# 「ガラスの街とやま」を発信する文化芸術の拠点 “ガラスといえば、富山”を目指して!

富山市ガラス美術館  
館長

土田 ルリ子氏

聞き手 理事長 沼田 雅博

コレクション展 光の「うつわ」(～2025年6月1日) 撮影: 田中祐樹

はじめに

富山市は、街づくりの施策として「ガラスの街とやま」への取り組みを40年前にスタートさせました。その一環として「富山市ガラス美術館」が開館して10周年を迎えます。今年1月、ニューヨーク・タイムズ紙の「2025年に行くべき52カ所」(52 Places to Go in 2025)に富山市が選ばれ、当美術館も注目を集めるなか、土田館長からお話を伺うことができました。(沼田 雅博・ぬまだ まさひろ)

## ——まずは富山市ガラス美術館についてご紹介ください。

富山市ガラス美術館は、2015(平成27)年8月22日に開館して、今年でちょうど10周年を迎える運びになりました。私設の美術館では、企業のオーナーが収集したコレクションを公開する場としてオープンするケースが多いのですが、富山市では特徴的な街づくりを目指す施策の一つとして、まず最初に「ガラスの街とやま」をキーワードに「富山市民大学ガラス工芸コース」を40年前の1985(昭和60)年に開講しました。その後、1991(平成3)年に作家の育



TOYAMAキラリ 外観

成機関として「富山ガラス造形研究所」を開校。3年後の1994(平成6)年には、造形研究所の卒業生や、ガラス作家に制作の場を提供し、作品の展示販売、ガラス制作の見学や制作体験、イベントの開催などを通してガラス産業を振興する目的で、「富山ガラス工房」が整備されました。ガラス作りには「炉」などの設備が必要であり、造形研究所を卒業したからといって作家としてすぐ独立することは難しいので、彼らを支援するという役割もあります。このように富山市のガラスに対する施策は、人材育成から始まっているのが非常に特徴的なのです。

陶芸であれば、それに適した土が必要で、その地域に根付いているわけですが、ガラスは人工的な素材なのでどこでもできますから、町おこしに利用されることが度々ありました。ガラスにゆかりのない町に突然美術館が建って、数年後に頓挫するというケースもありましたが、富山市の場合は人材育成から始まっており、実直かつ地道にスタートしました。造形研究所や工房ができてからほぼ20年経った後、最後にガラス美術館が開館したのも特徴的です。造形研究所の卒業生が制作した優秀な作品を富山市が所蔵して若い芸術家を応援していますが、それらは当館における収蔵品の基盤にもなっています。

——以前から、富山市でのガラスの取り組みはご存じだったんですね。

富山に来るまでは、サントリー美術館で28年間ガラス芸術を担当してきました。私が入社した当時は、美術の世界は男性社会が根強く、「学芸員」としての肩書はなかなかもらえませんでした。1999年の展覧会「日本のガラス 2000年 弥生から現代まで」で、明治から現代までの展示を任せていただいたことから展覧会企画に携わることになりました。その際に、現役で活躍中のガラス作家の方々に作品制作をお願いし、出品していただいたのですが、その何人かがガラス造形研究所の教授や学生さんでした。富山とのご縁はその時からで、以降も展覧会を企画する際には、富山市の所蔵品を借りに来ることが何度もありました。富山は私にとって特別な場所で、当時「ガラスの聖地」という印象がありました。

——学びの場である「富山ガラス造形研究所」(人材育成)、制作の場である「富山ガラス工房」(産業振興)、鑑賞の場である「富山市ガラス美術館」(芸術振興)という3つの拠点を一つの街に備えていることは珍しいのですか。

世界的にも非常に珍しいことです。断言はできませんが、学校・工房・美術館の3つがそ

ろっていることはないと思います。米国ニューヨーク州にコーニング社という世界最大級のガラスメーカーがあります。皆さんがお持ちのスマートフォンのカバーガラスはGorillaガラスという強化ガラスですが、それを開発した会社です。その100周年を記念して設立されたコーニング・ガラス美術館は、古代から現代まで5万点超の作品を収蔵している大規模な美術館ですが、そこに今年の秋、学校が開校するそうで、ガラス美術の世界では注目が集まっています。

世界的にガラスの美術館には、その地方の王族・貴族がコレクションしていたガラスを展示する形や、シャンパンのボトルを作っていて、昔から炉がある地域に美術館が建ち、作品制作の様子を見せるスタジオが併設される形はありますが、行政が人材育成から始めているのは、とても珍しいことです。

——富山の方は「(富山には)何も無いちゃ」とよく言います。県民性からなのか、目立ったアピールを好まないけれども、何か一つ特徴的なものが欲しい。そんな思いで40年前に始めたのがこの取り組みなのだろうと思います。

ガラスも、陶芸や漆芸といった日本固有の伝統産業と同様に、日常的に使われる器を作ることから始まって、それが量産されるようになり、用途に合わせてさまざまな種類のものを作るとなると、職人さんの技術が磨かれていって、最終的に文化・芸術の領域に発展していくのではないかという考えだったのかもしれませんが。



Ruriko Tsuchida

ガラスそのものの歴史は5000年、日本だけで見ても2000年の歴史があるのですが、特に日本人には、ガラスはどうしても新しいもののように捉えられがちで、ガラス＝コップという認識が一般的かもしれません。それだけ現代の日本の生活の中でガラスが身近だということでもあると思うのですが、なかなか芸術として捉えてもらえないところはありますね。

——そういう意味では、富山市には人材育成・生産・鑑賞の3つがそろっており、日用品を芸術作品の領域に昇華するための仕組みが出来上がっていると言えますね。

そうですね。まず40年前に「ガラスを中心に街づくりをする」ことを始めましたが、40年という長さは一つの歴史と言って良いと思います。

地道な取り組みが少しずつ花開き、ガラス美術館への来館者も増えてきました。開館5年目の2020年度はコロナ禍で落ち込みましたが、2022年度にはコロナ禍前の数字を超え、コロナが5類になった2023年度には20万人を超えました。そして、2024年度は12月の時点ですでに20万人と前年度の数字に達しており、その後ニューヨーク・タイムズに掲載されたこともあって1～3月の冬場も順調でした。非常にありがたいと思っています。

正直なところ、海外からのお客さまが増えたという実感はそこまでありません。海外からのお客さまの割合は多くみても2割程度ですが、



Masahiro Numada

それは以前からあまり変わっていません。ですから、増えているのは、ニューヨーク・タイムズに取り上げられたというニュースを聞いた日本の方、あるいは「一度も行ったことがなかったけど行ってみようか」という富山の方のようです。

——それだけ多くの人が関心を持ち、注目してくれているのは、ガラス芸術やガラス産業の裾野が確実に広がっていることの証ですね。

3月の初めから、「富山ガラス工房開設30周年記念展」を開催しています。30年間で富山ガラス工房に所属した作家のうち、現在も作家活動を続けている約80人の作品が展示されています。それを多くのお客さまにご覧いただけたことは、富山市のガラスの歴史を紹介できる良い機会になりました。

4階の常設展示室は当館の所蔵品だけで構成していますが、企画展では他所から借りてきた作品も多く含まれます。しかし、7月から始まる10周年記念展「Lives 一富山市ガラス美術館所蔵品選」では、当館の所蔵品だけで構成しようと思っています。この10年間、所蔵品だけの展覧会を企画してこなかったのも、この機会に富山市がこれだけ良い作品を持っているということを自信をもってお見せして、「これが全部富山市のものなんだ」ということを知っていただきたいと思います。

——富山市に縁がある作家の作品が多く収蔵されているんですね。

やはり人材育成を担う造形研究所があるので、そこから非常に優れた作家が多く生まれています。特定の地域に限定して収蔵しているわけではありませんが、結果として富山市にゆかりのある作家の作品が多くなっています。

ガラス作家として生きることは経済的にはなかなか成り立つものではない厳しい世界です。日本の家庭ではガラスのオブジェを置くような空間自体があまりありませんから。作家は自分自身の表現として作品を作りますが、やはり日用



品や食器も作れないと生計が成り立ちません。しかし、食器自体はそれこそ100円ショップでも売っていますし、そこそこスタイリッシュなデザインの食器が買えるところはたくさんありますので、作ればみんなが買ってくれるわけでもありません。非常に難しい時代だと思います。

——一部の伝統産業には、絶えないように「守られている」産業もあるように思います。ガラスは伝統という言葉とは縁が薄いなかで、富山市が支えていることになりませぬ。

そうですね。でも、守られていないことは決して悪いことばかりではありません。作家の皆さんは比較的フットワークが軽いですよ。海外に行ったり、招いたり。ガラスは国境を越えやすい素材なのだと思います。ある程度の実績がある作家になると、他のガラス美術館に招かれて、制作する様子を見せるワークショップを開催するなどの機会もあります。世界レベルで活躍するチャンスは他の伝統工芸よりも多いかもしれません。

——差し支えなければ、この美術館の館長に就任された経緯を教えてくださいませぬか。

本当に偶然なのですが、親しい友人が仕事のご縁で八尾の「おわら風の盆」に招かれたんです。おわらの時は交通規制があって帰るのが難しくなるので、地元の方から「うちに泊まってください」と言われたそうですが、さすがに知らない方の家に1人で泊まるのは気が引けたみたいで、「ルリ子ちゃんも一緒に行かない？」

と誘われました。私も普段は知らない方の家に泊まるなんて絶対にしないのですが、その時は何故か、行ってもいいかなって思ったんです。富山市には仕事でよく行っていました。実際に来てみたら、自分が知っていた富山とは全然違う富山がそこにはありました。八尾の町全体が高揚していて、「こんな街並みが富山にあるんだ」と、とても印象に残ったんです。

それに加えて、初対面の八尾の方たちに、私が富士山に登って感動したことを話したら、「確かに富士山は日本一の山だけど、富山には立山という素晴らしい山があるんですよ。今度一緒に登りましょう」と誘っていただいて、その場でスケジュールを組んで、その翌月に立山に登ったんです。その後も一緒に登山を楽しむ間柄になったのですが、たまたまその中にガラス工房の関係者の方がいて、そういった経緯から次第に富山市の職員の方とお知り合いになったのがきっかけです。

生まれも育ちも東京で、富山に血縁も地縁もありませんから、本当にガラスが導いてくれたと思っています。富士山に登ったのも、50歳を迎えるにあたって、自分がやっていないことや、今のうちにやっておきたいことは何か、と考えたことがきっかけでしたが、おかげで本当に良い方々と知り合えました。

——一般的に、ガラスは観光地と結び付きやすく、小樽、諏訪、箱根などのガラス美術館が知られていますが、正直言って「富山がガラスの街だ」という意識が広く浸透しているとは言えませぬね。

富山に来て最初に気付いたのが、「ガラスといえば富山」ということを、富山の方があまり認識されていないということでした。海外のガラス研究者の多くは富山市がガラスの街であることをよく知っていますし、私もガラスを芸術として紹介する立場で仕事をしてきたので、それを当たり前のように思っていたのですが、そうではないことに気が付きました。私がサントリー美術館で培った美術館やコレクターとの

ネットワークや、ノウハウをすべて役立ててもらって、「ガラスの街とやま」をもっと発信して、盛り立てて、根付かせていきたいと思っています。

——今日美術館にお邪魔して、早い時間から若い世代の来館者がたくさんいて驚きました。これからの美術館には、例えばオンライン予約を導入して来館状況を把握し、マーケティングに活用するといった運営も必要だと思っています。来館者の年齢、性別、居住地などさまざまなデータが把握できれば、次の企画や営業活動に生かしていけますよね。

ターゲットを常に意識しながら企画していくのは重要です。従来の美術館は来館者の大半を60代以上の方が占めていましたが、当館では10～20代の来館者が比較的多いんです。作品の解説をQRコードを使ってスマートフォンで読めるようにするなど、デジタル化の取り組みは他の美術館と比べ、理解していただきやすいかもしれません。

——富山市が、ニューヨーク・タイムズ紙の「2025年に行くべき52カ所」に選ばれ、ガラス美術館も取り上げられました。海外からの来館者を受け入れるための取り組みは何か行われていますか。

当館では開館当初から施設の案内を日本語と英語で併記していて、さらにQRコードを読み込んでいただくと8カ国語で案内が出てくるなど、いくつかの取り組みはすでに進めています。しかし、十分でないところもあります。例えばスタッフが全員英語を話せるわけではありませんし、英語を話さない海外からの来館者もいるので、自動翻訳機を各フロアの受付に設置しました。また、ギャラリートークと言って学芸員が作品解説をする日があるのですが、それを聞きたいとおっしゃる海外からの来館者のために、同時通訳のイヤホンで10人分揃えました。

——富山市がニューヨーク・タイムズ紙の52



カ所の一つに選ばれたポイントは、金沢のような混雑がなく、ゆったりと文化的な感動を味わえて、美味しいものが食べられるところではないかと思います。「何もない」という言葉も魅力の裏返しなのかもしれません。

富山の方の奥ゆかしさと言いますか、非常に実直で、親しくなってくるとものすごく人情に厚い気質は素晴らしいと思っています。

最近私も富山県民化しています。富山に来たばかりの頃は、東京に戻ることがあると、東京駅に降り立った途端にモードが変わって、誰よりも速く歩かなければいけないと思って競うように歩いていました。人混みもするすると歩けましたが、ある時、はたと「私は何をしているんだろう」と気が付きました。「なんで私はこの人より早くエスカレーターに乗ろうとしているのかしら。そんな必要は全くないのに」と。自分が今まで住んでいた世界は富山とは別世界だったのだと思います。

——美術館ができて10年、市の中心街にあって、これまでも街のにぎわいに貢献してきましたが、何か足りないと感じるものはありますか。

公共交通網が欲しいですね。富山市は車がないと行けない場所が多く、街の中心にあるガラス美術館には市内電車で来られますが、郊外のガラス工房までは車がないと非常に不便です。観光客の方がみなさんレンタカーを借りられるわけではありませんから。

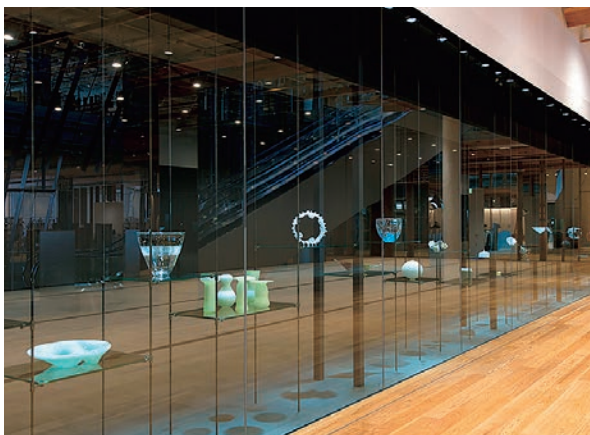
——3つの拠点が連携し、一体として周りの

方々から評価されるような状態をどうやって作るか、それが現在の課題なのですね。まずはこの3つの組み合わせが市民・県民にしっかりと認知されることが大切ですね。

ガラス美術館では学校招待プログラムをやっていて、市内の小学4年生には毎年来ていただいています。工房では、6年生が卒業するときにはペーパーウエイトを作っていただいているので、お子さんたちには、この3施設があることがじわじわ浸透してきていると思うのですが、まだ10年足らずの活動なので、大人の方々に認識していただけていないかもしれません。

——館長は富山の暮らしを楽しんでいらっしゃるようですが、一方で富山では、若い女性の県外への流出が多く、出生数が減り、人口減少に拍車をかけています。キラキラした場所がない、キャリア形成ができる機会がないなど、さまざまな意見を耳にしますが、魅力のある職場があって、そこで生き生きと働くお父さん、お母さんがいて、「そんな大人になりたい」と子どもたちが思ってくれたら、富山を離れない、あるいは離れても戻ってくる若者が増えると思っています。

富山は街と自然が近く、食べ物も美味しいですし、人は優しく、すごく良い所だと思います。一方で、私が美術館の窓から立山が見えることを喜んでいると、若い職員からは「私は窓から三越伊勢丹が見えた方が嬉しいです」と言われます。私にもそんな年頃がありましたから、キ



ガラス・アート・パサージュ 撮影：室澤敏晴

ラキラしたものを求めているのかもしれませんが。

ちなみに、美術館の職員はもともと市役所の職員ですが、みんな楽しそうに働いてくれていると思います。大変なことも多いとは思いますが、さまざまなイベントの開催など、市役所にはない仕事を経験できるのが面白いのかもしれないですね。

——事前にガラスの教育を受けてくるわけではありませんから、職員の方々も大変ですね。個人的には、ガラスは壊れやすいというイメージからか、やや近寄り難い印象があります。館長が考えるガラスの魅力について教えていただけますか。

ガラスの魅力は、一般的にはすごくフラジャイル（壊れやすい、繊細な）であることだと言われることが多いのですが、実はスペースシャトルの機体表面素材はガラスだったり、ガラスには「脆さ」と「強靭さ」の両極の性格があります。また、透明な素材だと思われがちですが、もともとは不透明な素材です。ガラスにはさまざまな性格・性質があって、作家がガラスのどの性格に魅力を感じているかによって出てくる表情が違っているので、作家の数だけガラスの表情があるんです。

——逆にいうと、色や形などが同じものをたくさん作るのは難しいのでしょうか。

昔の薩摩切子の器を見てみると、5枚組の皿でも色の濃度や切り方にバラつきがあるものもあります。薩摩切子は薩摩藩が急成長させた産業ですが、1863（文久3）年に薩英戦争が起こったため、発祥から10年ほどで壊滅してしまいました。現存している作品が少ないため希少価値はありますが、技術が成熟するにはもう少し時間が必要だったと思います。今ではコンピューターで管理することで、均質な色や形を再現することは比較的容易になっています。

——今後の活動について、何か構想などはありますか。

2022（令和4）年12月から、ICOM（国際博物館会議）のガラス委員会の委員長を務めています（任期3年）。委員会に入ったのは、以前コーニング・ガラス美術館から作品をお借りした際に、「これからも海外の美術館から作品を借りたいなら入っておいたほうが良い」と勧められたからです。そのおかげで世界のガラス美術館の関係者とのネットワークができました。委員長である今が一番発信力があるタイミングなので、機会を活用して、昨年開催した大賞展のことや、3機関が連携しての取り組みのことなど、富山市とガラスに関わるプレゼンテーションをするようにしています。今後も、美術館、ガラス工房、造形研究所の3カ所の連携について積極的に情報発信をして、「ガラスの街とやま」の認知度を高めていきたいですね。

また、これまで多くの海外作家とコンタクトを取って展覧会を企画してきましたが、単に自分たちだけで企画するのではなく、ガラスを専門にしている国内外のガラス美術館と共同で何かを企画することで、他の美術館とつながりを持ちたいと思っています。美術館同士のネットワークが広がって、多くの人たちがガラスでつながっていく、そんな「富山市がガラスで世界をつなげる」活動を学芸員にも試みてもらいたいですし、私はその火種を起こしていきたいと思っています。

さらに、当館に足りていないのはアーカイブの公開です。コレクションのアーカイブ化を少しずつ進めていますが、まだ十分ではありません。物理的な距離を縮めるには、やはりインターネットが有効です。私も展覧会を企画する際に、「この部分にこういう作品が足りない」という時には、インターネットで各美術館のアーカイブをのぞきます。そうすると、どの美術館にどんな作品があるかも分かりますし、展覧会のイメージも膨らみます。

現在、当館には約700件の収蔵品がありますが、その半分も公開できていません。収蔵品が増えれば増えるほど公開が遅くなってしまい、今は素晴らしい作品がたくさんあるのに、実際

に美術館に来てもらわないとどんな作品があるのかわからない状態ですが、それでは駄目だと思っています。それは富山市がこんな良いものを持っているんだということを市民の方に知ってもらうという意味でもそうですが、美術館同士のネットワークを広げていくという意味でも重要です。美術館同士の交流は物の貸し借りでも広がっていきます。当館はまだ貸し出しが少ないんですね。どんどん貸し出しをできるように、アーカイブ公開を進めていく必要があると考えています。

——物の交流が始まれば、人の交流も増えますね。人の交流が増えれば、それが有機的に結びつき、新しい何かが生まれてくるかもしれません。

コロナ禍でオンラインミーティングが当たり前になり、とても便利になりましたが、オンラインだとその時間その話題で終わってしまうんです。その端々がないというか、雑談のときに何かヒントをもらえたり、その人の面白い人柄が見えてくるということが減ってしまいました。やはりFace to Faceが一番重要だと思います。これからもガラス作品が人と人とをつなげてくれるのではないかと期待しています。

——本日は貴重なお話をありがとうございました。

